

男女ともに 幸せに働ける 業界へ

フリーライター

三上 美絵



Mie Mikami

「女性なら」優秀な人が採れる?!

「もうそんな時代じゃないけど、職人が嫌がるから…」。もう三〇年も昔の話だ。ゼネコンに勤めていた私が、社内報の取材で山岳トンネルの現場を訪れたときのこと。事務所での取材後、坑内を見学できるか聞くと、所長は申し訳なさそうにそう言った。女性が坑内に入ると山の神が怒る、と信じられていた頃のなごりだ。今はトンネル現場でも、女性の施工管理者が珍しくないことを思えば、隔世の感がある。

会社を辞めフリーライターになつてからは、さまざまな建設会社の取材をしてきた。大手ゼネコンが女性技術者の採用を増やし始めてから、一〇年以上経つだろうか。当時、ある採用担当者は「男性の新卒は他社と取り合いになるが、女性なら優秀な人材をいくらでも採用できる」と本音を話してくれた。

女性は優秀な人でも引く手あまたではないという事実、同性とし

て暗澹たる気分になった一方、この会社は慧眼だとも思った。性別に関係なく、「優秀な人材」という枠で女性を採用したなら、入社後も男性と同様に技術者としてきちんと育成するはずだからだ。実際にこの会社の女性技術者たちは、現場の各工種のリーダーや課長職にも登用され、生き生きと働いていた。

トイレ美化より「技術教えて」

建設業界における女性の躍進が目覚ましい反面、残念な話も聞く。例えば、社内結婚をした共働き夫婦で、夫がたまたま保育園のお迎えのために早めに退社していたところ、上司に「奥さんはいつ退職するの?」と言われたという。いまだに「子どもの世話は母親がするもの」という風潮が消えていないようだ。

また、女性のためによかれと思つてしたことが、逆に当人たちを苦しめているケースもある。数年前の話だが、ある会社で女性技術者を一つ

の現場に集めてチームとし、トイレ美化など職場の労働環境改善プロジェクトを立ち上げた。

もちろん、職場の環境改善に女性の視点を導入するのは、悪いことではない。女性にとって快適な職場は、男性にとっても快適なはずだ。それに、彼女たちはそれだけをやらされていたわけではなく、通常の施工管理も担当していた。

しかし、プロジェクトに時間を取られることで、本来の業務に当てられる時間が減っていたのも事実。チームのメンバーが、オフレコで漏らしたひと言が忘れられない。「環境美化より先に、もっと技術を教わりたい。同期入社男性が現場でどんな仕事を覚えていくのを見て、とても焦っている」と。

たしかに、施工現場のトイレ環境は整っていないケースもあり、向上が求められる。女性が実際に現場で働いている以上、その予算が認められるような土壌づくりは必要だ。ただ、女性技術者に本来の業務に優先してトイレ美化を考えさせたり

するのは、少し違う気がする。

「働き続けられる建設業」へ

女性技術者たちからよく聞くのはむしろ、「長く働き続けられる環境の整備」を望む声だ。「出産した後現場で働きたいが、無理だろうか」と不安を口にする人も多い。

建設現場は各地に分散しているから、一現場や一社で託児所を設けたりするのは難しい面もある。そこで例えば、エリアごとに現場横断・企業横断で利用できる託児所を設けることはできないだろうか。もちろん、女性社員だけでなく男性社員も子どもを預けられるようにする。

社員の男女比率の差を小さくすることも重要だ。すでに取り組んでいる会社は多く、女性の割合は急速に増えてきているが、やはりまだ全体的に人数が少ない。

特に技術者では女性の割合は八%程度。もともと、理工系の女子

学生は男子に比べて圧倒的に少ない。え、理工系学部への進学を親族に反対されたという話を聞いたこともあり、根の深い問題だ。社会全体で価値観を変えていくしかない。そのためにも、活躍する女性技術者のロールモデルを増やす必要がある。

一方、建設業で女性にとつてのハードルとしてよく挙げられるのは、体力の問題だ。しかし、施工管理者の本来業務は力仕事ではないし、過度な残業も緩和されつつある。さらに、私が「土木技術者になるには」(ペリかん社)という職業紹介本の執筆に際し取材した男女の技術者のほとんどが、求められる資質として挙げたのは「コミュニケーション力」だった。それなら性別は関係ない。

処遇面での不公平感をなくすことも大切だ。施工管理なら施工管理、設計なら設計、事務なら事務のプロとして、どの部分はできて、どの部分ができていないか。「個」として評価されたのなら、納得感がある。出産・育児・介護などで、出力

一〇〇%で働けない人がいる職場では、男女問わずその分をカバーした人がきちんと評価される仕組みもほしい。また、総合職に女性が少なく、一般職に女性が多い現状も修正を期待したい。

世界銀行が今年三月に公表した経済的な権利をめぐる男女格差調査の結果、日本は一九〇カ国・地域中一〇三位だった。こうした状況にあつて、もしも建設業が他産業に先駆けて格差撤廃に成功すれば、業界に向けてられる眼差しは大きく転換するだろう。「男社会」と言われた建設業での成功は、全産業を牽引することにもつながるはずだ。本当のイメージアップは、そうした実績の後から自然についてくる。

建設という仕事は、素晴らしい。私は心からそう思っている。会社を辞めてからも、微力ながら取材・執筆を通じてその魅力を発信してきたつもりだ。これから先、建設業が多くの人に就職先として選ばれ、男女ともに幸せを感じながら働ける業界となることを願ってやまない。